相変わらず元気にやっています

——平成２年度学生相談室活動報告——

総合科学部　岩　村　聡

学生相談室から日頃の活動状況をご報告する季節が，またやってきた。

平成２年度，学生相談室は，基本的には相変わらずだが，いくつかの変化もあったし，多少の新しい試みも行なった。

まず，相談体制としては，空席だったもう１つの専任相談員ポストに，大河内浩人教官が着任し，前年度後半の片肺飛行状態は解消した。大河内先生は，若くて素直でフレッシュな感覚の人なので，学生のみなさんのよいお兄さん役として，気軽に利用してもらえるとよい。

新しい試みとしては，従来の「自発来談を待つ」基本方針に加えて，「援助の必要な学生への（やや）積極的なアプローチ」も考慮することになり，その手始めとして，「聴講手続きをしていない学生への援助プロジェクト」を行なった。その結果，学生やその父母からしっかり感謝されたケースもあったし，今後援助の拡大を検討すべき問題点もわかってきた。

また，これまで来談状況の把握のために使用していた大型コンピューターによる集計プログラムは，パンチ・カードやパンチング・マシンが廃れて，時代にそぐわなくなったため，かなりの時間とエネルギーを費やして，パソコンによる集計プログラムの開発を行ない，この年度の来談統計処理から使用を開始した。

これら，学生相談室の日常活動や新しい試みに，さまざまなご協力やご支援をくださった方々，本当にありがとうございました。

１．カウンセリング

平成２年度，学生相談室を訪れた人は，実数で278名，のべ数で856名（日，回）であった。前年度と比べて，実数では33％，のべ数では６％減少している。

減少の最大の理由は，新入生の履修相談の激減にある。前年度４月は，新入生履修相談への対応のために，黒川室長や学務委員の先生方に臨時相談員をお願いして，宣伝にも力を入れた結果，１日で124名という記録的な来談があったが，この年度は宣伝のしかたが違ったためか，前年度のような来談ラッシュはなかった。また，相談員の交代があると，

表１　男女別，学年別，学部別来談者実数

	平成２年度	平成元年度
計	278名	416名
男	201	276
女	77	139
１年	162	313
２年	44	42
３年以上	47	45
院生等	25	16
総合科学部	18	23
文学部	16	29
教育学部	37	55
学校教育学部	19	35
法学部	21	33
法学部第二部	5	8
経済学部	6	28
経済学部第二部	7	8
理学部	32	43
医学部	7	12
歯学部	4	4
工学部	67	105
生物生産学部	14	16
院生等	25	17

転出を目前にした相談員や着任早々の相談員はフル回転できないので，活動の谷間ができる。(その意味では，大河内相談員には，最初からよくがんばってもらっているが……。)そうした影響もあったものと思われるし，教育学部等の移転の影響もあったものと思われる。

来談者実数の男女別，学年別，学部別内訳は，表1のとおりである。

男女別では，女子学生の減少が著しい。学年別では1年生が激減し，そのほかの学年は多少とも増加している。女子学生や1年生の減少は，前述の履修相談減少のせいであろう。前年度，その部分が例年になくふえていたからである。学部別では，経済学部，学校教育学部，文学部など，ほとんどの学部が減少し，院生等だけが増加している。

相談内容別実数とのべ数は，表2のとおりである。

ここでは，心理適応関係の相談が大幅に増加し，修学進路関係の相談が減少している。これは，前述のとおり，新入生履修相談の様変わりと，相談員交代の影響であろう。さらに，修学進路関係の中では，新入生履修相談がカウントされる「勉学・研究」のほか，「転科・転学部」などが減少し，「再受験」などが増加している。また，心理適応関係の中では，「対人関係」「精神衛生(従来の心理障害)」などが増加している。

このうち，「転科・転学部」相談は，大学入学志願者の増加に対応して，「欠員」(それが転科・転学部の前提条件になっている)をできるだけ少なくする方針がとられていることに加えて，入試制度改革の影響を受けて転科・転学部制度も修正され，学生相談室への相談の必要性が小さくなったためかと思われる。つまり，従来の転科・転学部制度の下では，希望者は「入試センター・テスト」の成績のチェックが必要であり，その目的のために学生相談室へ来談する学生も少なくなかったのだが，入試改革によって入試センター・テスト成績の相互比較が困難になり，それに応じて転科・転学部のルールも改正された結果，学生相談室への来談も減少した，という事情があるように思われる。

表2　相談内容別来談者実数及びのべ（日）数

	平成2年度	平成元年度
計	278名 (856日)	416名 (907日)
修学・進路関係	211(349)	371(565)
進路関係小計	87(154)	100(195)
就職	3(5)	3(3)
進学	2(11)	1(1)
留学・旅行	5(5)	5(5)
休学・退学	5(12)	3(4)
転科・転学部	26(40)	38(63)
再受験	25(54)	23(35)
留年	1(1)	2(10)
その他の進路	20(26)	25(74)
勉学・研究	109(151)	258(323)
課外活動	6(10)	4(11)
その他	9(34)	9(36)
心理・適応関係	56(494)	39(336)
精神衛生	32(381)	21(237)
対人関係	21(106)	8(39)
自己探求	1(2)	10(60)
その他	2(5)	0(0)
その他	11(13)	6(6)
経済生活	5(6)	0(0)
その他	6(7)	6(6)
心理性格	3(7)	10(60)
対人関係	21(106)	8(39)
心身健康	32(381)	21(237)
進路修学	205(339)	367(554)
学生生活	11(16)	4(11)
その他	6(7)	6(6)

なお表2の末尾の部分，「心理性格」以下の6項目は，(全国)学生相談研究会議が提案している「共通分類」による再集計結果である。今後は，他大学の相談機関の活動状況と比較するため，あわせて公表するようにしたい。

来談者のべ数の月別内訳は，表3のとおりである。

新入生履修相談の変化を受けて4月は大幅に減少したが，他の月はいずれも増加している。

表3　来談月別来談者のべ（日）数

	平成2年度	平成元年度
計	856日	907日
4　月	161	351
5　月	81	78
6　月	80	73
7　月	57	47
8　月	21	17
9　月	65	56
10　月	87	80
11　月	73	42
12　月	58	53
1　月	61	46
2　月	67	39
3　月	45	25

前書きでも触れたが，これらの数字をはじき出すために，学生相談室では，パソコンとBASICによる集計プログラムを開発した。集計作業の新方式として，大型機や「端末」を選ばなかったのは，年に1度の仕事のために多額の設備を導入することは適切でないし，秘密保持を生命としている学生相談室としては，来談学生の氏名などが書かれている「来談者カード」からの入力作業を，学生や他の教職員の出入りする場所で行なうことは，避けなければならないからである。

プログラムは，データーの新規入力・追加入加，ディスプレー（2種類），印刷，ヴェリファイ，論理チェック，修正・挿入・削除，集計用ファイルへの分解，ソート，複数のファイルの統合，男女別・学年別・学部別・相談内容別の集計，来談月別・相談内容別の集計，担当カウンセラー別・相談内容別の集計，来談日別・相談内容別の集計，の14本になった。このうち，ソート（並べ替え）のプログラムなどは，278人，856件のデーターの処理に，学生相談室の16ビット機を使って20分，32ビット機でも10分かかる。プログラミングは，日常業務のあいまを縫って行なったので約2年かかり，今回の集計にかろうじて間に合った。

以下は，またいつものせりふだが，……。

学生相談室は，広島大学の学生の相談なら，なんでも受けつける。

勉強のしかた，成績不振，不登校，留年，休学，教員などの資格のとり方，留学，クラブ活動，宗教団体とのトラブル。進路変更，転科・転学部，大学再受験，就職，大学院進学，友達づくり，対人関係，先輩や教師とのトラブル。失恋，性格，自己開発，不安，劣等感，性的な悩み，いじめ，迫害。経済生活，契約販売やローンのトラブル。交通事故，大学への苦情，などなど……。（そして，相談室だけで解決しきれない問題は，どこへ相談したらいいかをいっしょに考える。）

カウンセラーとの相談の特色は，まず，1対1で必要なだけたっぷり**時間をかけて**，必要なら回を重ねて，相談にのってもらえること。また，相談の**秘密が守られる**こと。さらに，アドバイスの**押しつけがない**こと，なとである。

あなたも，いつでも気軽に学生相談室を訪ねてください。

また，不登校，ノイローゼ，留年など，指導困難な学生をかかえてお困りの先生方。どうぞご遠慮なく，学生相談室へご相談ください。なお，学生相談室は，総合科学部プレハブ3号棟（大講義室前）2階にある。開室時間はいちおう午前9時から午後5時まで（土曜日は12時30分まで）だが，この時間帯に来室できない人のためには，事前に連絡さえあれば，できるだけ希望の時間に相談に応じている。

2．「聴講手続きをしていない学生への援助プロジェクト」

さて，不登校学生，休学中の学生，留年学生等，履修が遅れている学生の中には，解決困難な問題をかかえている人も，多いものと推察される。このため，援助を必要としている学生の存在をキャッチし，希望する学生には相談に乗り，学生生活へのスムースな適応を助けたいと考えた。ただ，はじめから難しい問題をかかえた学生が一時に殺到して，対

応しきれないようでも困るので，様子を見ながら一歩一歩無理なく押し進めて行く方法を選んだ。そこで，まず手始めとして，一般教育段階にあって，学期はじめの「聴講手続きをしていない学生」を対象に，チューター等と連絡をとりあってその動向を調べ，希望者には相談面接を勧める試みを，行なうことにした。

「聴講手続きをしていない学生」は，総合科学部では，聴講手続きのコンピューター処理の際に打ち出され，前期は6月頃各教官に知らされる。この年度前期に，聴講手続きをしなかった学生は，41名であった。そのリストのうち，学生相談室が，援助の必要性を調べるためにチューターに連絡をとったケースは28。さらにそのうち，本人の動向がわからないなどの状況から，チューターの了解を得て，学生本人や保護者と連絡をとったケースは6名であった。この内には，その後継続的に来談した学生1，その後のコンタクトをチューターにバトン・タッチしたケース2，などが含まれている。学生相談室として学生本人や保護者と連絡しなかったケースは，チューターがその必要なしと判断されたものや，チューターからの反応がなかったものである。

また，41名のうち，チューターと連絡をとらなかった13名の内訳は，学生相談室として既に対応中のケース1，学生相談室として既に動向がわかっていて，新たな対応は不要と判断したケース3，職場の都合等で休学中のため，対応不要と判断したもの9，であった。

これら，チューターや，事務室や，学生本人や，保護者とのコンタクトによって判明した，41名の動向（聴講手続きをしなかった理由）別の内訳をまとめ直すと，次の通りである。すなわち，休学・留学中のもの18（このうち，病気2，経済的理由2，家庭の事情3，職場の都合10，留学1）。留年のため1。課外活動のため1。進路変更したため3。再受験をめざして受験勉強中のため6。不詳12，であった。

これらの作業の結果，いくつかのことがわかった。まず，聴講手続きをしていない学生のうち，様子がわかったものの中には，ノイローゼなどの学生はあまり多く含まれていなかったこと。しかし，「病気休学」「留年」など，大学としてなんらかの援助的対応が望ましいと思われる学生は，多く含まれていたこと。休学手続きをしていない学生の中には，再受験をめざして受験勉強中のものや，他の大学などに入学したのに退学手続きを行なっていないものなどが多いこと。再受験をめざして受験勉強中の学生の中には，関係のルール等に不安を持っているものが多く，入試合格後または失敗後の援助が必要な場合も多いことから，この時期にコンタクトしておくことは，望ましいと思われること，などである。

だから，私達としては今後，次のような目標を検討したいと考えている。すなわち，「聴講手続きをしていない学生」に関して，チューターとのコンタクトをさらに拡大すること。休学者への援助引き受けも，もう少し拡大すること。このため，事務室とのネット・ワークを強化すること。さらに，援助対象の拡大を検討するため，留年者等についての簡単な実態調査を行なうこと，などである。

「聴講手続きをしていない学生」の後期分は，12月に配布された。これに対する私達のとり組みの結果は，まだじゅうぶんまとまっていないので，大ざっぱな数字だけにとどめるが……。

総数91名。うち，学生相談室がチューターに連絡をとったケース54。さらにそのうち，学生・保護者と新たに連絡をとったケース3。また，学生相談室として以前からの援助を継続したケース6。学生相談室として既に動向がわかっていて，特別の対応は不要と判断したケース15，など。なお，このたびは，私達学生相談室が直接学生とコンタクトするというよりも，チューターの先生ご自身がこうした学生の問題ととり組まれるために，ご相談に乗ったケースがいくつかあった。

また，91名の動向別内訳は，休学・留学中

34（うち，病気5，経済的理由9，家庭の事情3，職場の都合11，留学6）。進路変更したため2。再受験をめざして受験勉強中のため11。不登校的状態6。不詳38，であった。

3．グループ

学生相談室では，個人相談のほかに，グループ活動も行なっている。いずれも，広大生なら誰でも参加できる「仲間の場」となっている。

「オープン・フライデー」は，授業期間中毎週金曜日午後5時から6時30分まで，学生相談室で開いている，話しあい中心の会である。1984年の発足。自由であたたかく，真剣な話しあいをめざしている。会員制をとらず，都合のいいときに（時間の途中からでも）自由に参加できる。話しあいは，参加者のうちの誰かが最近のできごとや，生活や，当面している問題などを話し，みんながそれに感想を述べたりする。会費200円でお茶やコーヒーやお菓子が出る。月1回は，バースデー・ケーキを用意して，その月生まれのメンバーのお祝いもする。

平成2年度中には23回開催した。参加者は実数で16名。うち，学部生は10，院生等3，教職員1。のべ数107名。平均5名。前年度と比べて，かなり減少している。常連だった何人かの教育学部生が参加しにくくなったり，学部移転の影響なども感じさせられた。

この年度，「オープン・フライデー」は，後述の土曜友の会と合同で，いくつかの行事

「ピクニック」

も行なった。5月には，いつものようにピクニックを行なった。行き先は恐羅漢山。参加者10名。マイ・カーに分乗して，高速道路をドライブし，ゲレンデでわらびを採ったり，手分けして作ったお弁当を食べたり，昼食後元気な人は山頂（1,346m）をめざしたりした。7月は，メンバーの提案で，例年のビア・ガーデンのパーティーのかわりに，大衆演劇の観劇会を行った。行き先は清水劇場。参加者は6名。澤村謙之介一座の芝居や歌謡ショーを楽しんだり，大衆演劇の美学を論じあったりした。12月には忘年会を行った。参加者10名。お酒を飲みながら，一人ひとり近況を話したりした。2月には，卒業予定者の送別会を兼ねたカラオケ・パーティーを行なった。参加者11人。カラオケ・セットや楽器などもある店を借り切り，飲物や鍋物の材料なども持ち込んで，飲んだり食べたり歌ったりした。みんなに無理なくマイクがまわり，「歌は苦手」といっていた人も結構個性的に歌って，本当に楽しい会だった。

こんなグループに，あなたも，気が向いたときに参加してみませんか？

「土曜友の会」の方は，月1回土曜日午後2時30分から5時30分まで，学生相談室で開いている。1975年の発足。広大生のほか，卒業生や，他大学学生や，社会人にも開放している。会費はやはり200円。この年度は，12回開催した。参加者は実数で27名。うち，広大生6，教職員3，卒業生6，その他12。のべ数87。平均7名。今年，こののちの開催予

定日は，6月1日，7月6日，8月3日，9月7日などである。

第15回（合宿）「エンカウンター・グループ」は，3月上旬，3泊4日の日程で，西条研修センターで開催した。参加者は10名。学生6名のほか，申　栄治（福岡大学），石川隆義（歯学部）の方々，それに学生相談室の大河内先生と筆者岩村が参加した。会費10,000円。4日間は，ゆったりした雰囲気の中で，互いに自分の歩みを話したり，感想をいいあったりした。ゲームや，トランプや，卓球や，ビア・パーティーなども楽しんだ。前年度などと比べて，やや劇的な展開になった印象もある。終了時のアンケートでは「非常に満足している」が1，「満足している」が5。「どちらともいえない」や「不満」や「非常に不満」という回答はゼロであった。

土曜友の会主催の第13回「エンカウンター・グループ」は，8月下旬，やはり3泊4日の日程で，大野町でおこなった。参加者は28名。前年度よりふえた。あたたかい雰囲気の会だった。

参加者の感想文から，一部を紹介したい。

『来て良かったと思います。今までこだわっていた事を整理し，自分自身を一歩前進させることが出来たように思います。目的が果たせました。うすうす感じていたことをきちんと感じることが出来ました。』

『何となくけだるい眠けの中で，そよそよと気持ちがよい。「ことば」を食いながら生きてきた自分が，ここにきてようやく「沈黙」を味わえるようになった。最終日，廊下で頭の中にメロディーが流れた。「さよならは悲しみに……，さらば，涙と言おう」。feel good. だったのだった。』

『不思議な気分です。34年生きてきて，こういう過ごし方や空間がこの世にあったのかという気持ち。まず，沈黙のここちよさ。ここでは発言を強要されない。また，考えをのべたり，自分を出したりしたあとの何か気まずいような恥ずかしいような気持ちにおそわれずにすみました。全体会が2つ，グループ・セッションが7つ。退屈することがなく，しかもゆったり楽な気分も味わえました。ここまでつきあわないと，またこういうゆとりの時間がないと，本当の意味での人とのつきあいはできないのかとも思いました。

自分も結構思っていることが言えたし，人のこともいい面がビンビン胸につたわった気がしています。勉強になりました。自分の中で忘れていたこと，また新発見もあり，帰ってから反すうしてみたいと思っています。それで自分がかわるかもしれない。これは今後の問題。それよりも，特にグループの9人がこれからバラバラにそれぞれの場に帰っていくけれども，ここで出あえたこと，あそこで生きているんだナと思えることがうれしい気持ちです。』

『とても新鮮でした。自分をさらけ出すことがかなりできました。人の悩みを聞くのも，こころよいものがありました。かまえない自分でありつづけたいと思います。一期一会。再出発です。余生を楽しみたいです。』

今年度は，8月23日（金）～26日（月），大野町の国民宿舎宮浜グリーンロッジで開催する。世話人は，大島啓利（国立療養所鳥取病院），山崎恭子（広島修道大学），大西俊江（島根大学教育学部），秀島和則（広島県福祉事業団），それに筆者岩村，ほか若干名。参加費は，学生35,000円，一般40,000円。申込締切は8月12日（月）である。

あなたもいちど，このような会に参加してみませんか？